横浜トリエンナーレ2011
第１回記者会見資料

2010年10月１日

YOKOHAMA TRIENNALE 2011

本資料についてのお問合せ先
横浜トリエンナーレ事務局
〒220-0012　横浜市西区みなとみらい3-4-1　横浜美術館内
TEL　045-663-7232｜FAX　045-681-7606
広報担当：平（タイラ）
E-MAIL　press@yokohamatriennale.jp

ごあいさつ

第4回目となる「横浜トリエンナーレ2011」は、来年の8月6日から11月6日までの予定で開催されます。本日、アーティスティック・ディレクターとして、三木あき子さんをお迎えすることができました。

「横浜トリエンナーレ2011」からは、運営の主軸が、第1回以来中核を担ってきた独立行政法人国際交流基金から横浜に移り、横浜美術館が主会場としてハード・ソフトの両面にも深くかかわることになりました。2001年の第1回開催から10年という節目を迎える横浜トリエンナーレは､大きな変化の時期を迎えています｡横浜トリエンナーレの自立と継続のための、次なる一歩を踏み出す時期でもあります。

1859年の横浜開港以降、世界に開かれた、経済、情報、文化の窓口として発展してきた横浜は、近年、｢創造都市構想｣を掲げ､アートの力を都市と市民生活の発展に生かす施策を実施してきました｡その成果として､黄金町､BankART Studio NYK､象の鼻テラス、東京藝術大学、北仲スクール、本町ビルシゴカイ、万国橋SOKO等、NPOや大学、民間企業の運営により、建築家、クリエーター、アーティスト等の横浜における活動も、この数年で活発になっています。このような横浜市の歴史的、文化的背景のもと、横浜美術館と日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）を主会場とする「横浜トリエンナーレ2011」では、公立美術館、オルタナティヴ・スペースという異なる空間で、コンパクトで質の高い展覧会を開催しつつ、NPOや大学を含む多様な組織や市民とのネットワークを活用する方向性が、より明確になると考えます。

10月21日には羽田空港の新国際旅客ターミナルがオープンし、アジア諸国がこれまで以上に身近となるこの機会を捉えて、東アジアへの発信にも力をいれたいと思います。

横浜の文化活動の中核を担う都市型国際展として､創造都市横浜にふさわしいスケールと内容を吟味し､アジアをはじめとする国際的なネットワークを図りながら、継続可能なトリエンナーレを構築したいと思います。

横浜トリエンナーレ2011
総合ディレクター
逢坂　恵理子

横浜トリエンナーレ2011　開催概要

名　　称　　：横浜トリエンナーレ2011
会　　期　　：2011年8月6日（土）～11月6日（日）
※会期中の休館日は、決定し次第お知らせします。
会場　　：横浜美術館、日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）、その他周辺地域

主　催　　：横浜市、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会
共　催　　：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

総合ディレクター　　：逢坂恵理子（横浜美術館館長）

アーティスティック・
ディレクター　　：三木あき子（パレ・ド・トーキョー チーフ・キュレーター）

横浜トリエンナーレ事務局
〒220-0012　横浜市西区みなとみらい3-4-1　横浜美術館内
TEL　045-663-7232｜FAX　045-681-7606｜E-MAIL　press@yokohamatriennale.jp

ホームページ： www.yokohamatriennale.jp

広報担当：平（タイラ）

横浜トリエンナーレ2011
アーティスティック・ディレクター・ステートメント：
世界をどこまで知ることが出来るか *

21世紀初頭の現在、科学技術は高度に発達し、インターネット等のメディアによって世界は隅々まで明らかにされたかに思えます。しかし、我々の身の回りには、まだまだ科学や理性では説明できない世界の不思議が多く存在しています。

次回の「横浜トリエンナーレ2011」は、「われわれは、世界をどこまで知ることが出来るのか」という問いのもと、世界や日常の不思議、魔法のような力、さらには超自然現象や神話、伝説、アニミズム等に言及した作品に注目したいと思います。

この方向性は、決して科学の限界を問うものでも、また神秘主義を讃えたり、単にアートの娯楽性のみを追求するものでもありません。それよりも、こうした科学では解き明かせない領域に改めて眼を向けることで、これまで周辺と捉えられていた、あるいは忘れ去られていた価値観や、人と自然の関係について考えるとともに、より柔軟で開かれた世界との関わり方や、物事・歴史の異なる見方を示唆しようとするものです。

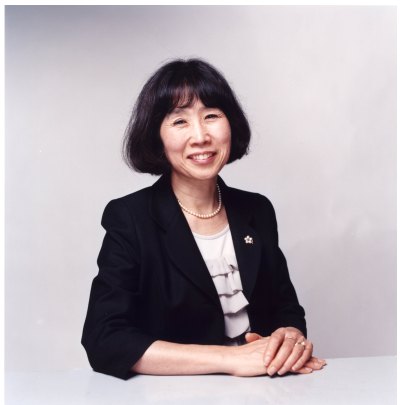
なお、まだ準備の初期段階のため、タイトルを含め具体的な企画内容については、今後の発表となりますが、この第４回トリエンナーレより、横浜美術館をメイン会場として新たな第一歩を踏み出すことになったことを受けて、本展では必ずしも国内外の現代アーティストの新作ばかりに拘るのではなく、美術館だからこそ可能な古今東西の歴史的作品や横浜美術館の所蔵品も一部展示の中に含みたいと考えます。さらには、フォークロア等通常の美術の枠には入りにくい作品も含み、時代、文化背景の異なる作品が対峙、対話することで新たな解釈が生まれたり、分類やカテゴリーにとらわれない自由な鑑賞の旅を創出します。また、展示作品には、宝探しのような楽しさに満ちた作品や、奇想天外でユーモアに富んだ作品も含まれ、子供のような純粋な好奇心、そして感動や驚きを喚起します。

このように、知らない世界の探求、新しい知識の航海への船出ともいえるような本展が、停滞感が強く先行きの見えない現代に対してなんらかのメッセージを持ち、また世界中で国際展が氾濫し、その存在の明確化が求められるなか、世界に初めて開かれた港である横浜に適した国際展のかたち、そのアイデンティティーの模索に繋がれば幸いです。

横浜トリエンナーレ2011
アーティスティック・ディレクター
三木あき子

*タイトル、作家については後日発表予定

横浜トリエンナーレ2011　ディレクター



総合ディレクター

逢坂恵理子（横浜美術館館長）

撮影：鈴木理策

学習院大学文学部哲学科卒業、芸術学専攻。国際交流基金、ICA名古屋で、数多くの現代美術国際展にかかわり、水戸芸術館現代美術センター（1994年-2006年、1994年より主任学芸員、1997年より同センター芸術監督）、森美術館アーティスティック・ディレクター（2007年-2009年）を経て、2009年4月より現職。主な企画展に、「クリスチャン・ボルタンスキー展」（1990年ICA名古屋）、「今日の作家展－視えない現実」（1993年横浜市民ギャラリー）、「アンディー・ゴールズワージー：ふたつの秋」展（1993-94年栃木県美術館/世田谷美術館）、「アネット・メサジェ：聖と俗の使者」（2008年森美術館）等がある。水戸芸術館では「ジェームズ・タレルー未知の光へ」（1995年）、「イリヤ・カバコフ：シャルル・ローゼンタールの人生と創造」（1999年）、「宇宙の旅」（2001年）、「カフェ・イン・水戸」（2002年、2004年）、「クロード・レヴェック」（2002年）、「Living Together is Easy」（2005年メルボルン・ヴィクトリア州立美術館巡回）、「人間の未来へーダークサイドからの逃走」（2006年）等企画多数。第3回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（1999年）日本部門コ・キュレーター、第49回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー（2001年）として国際展にも関わる。著書に『12人の挑戦－大観から日比野まで』（2002年茨城新聞社刊）、『アネット・メサジェ：聖と俗の使者たち』（2008年淡交社刊）等がある。

アーティスティック・ディレクター

三木あき子（パレ・ド・トーキョー チーフ・キュレーター）

米国ワシントン大学美術史科卒業、パリ第四ソルボンヌ大学美術史科修士課程終了。インディペンデント・キュレーター、電通アートプロジェクト共同ディレクター等を経て、2000年より現職。
主な企画展に、「第46回ヴェネチア・ビエンナーレ：トランスカルチャー展」（1995年ヴェニス他巡回）、「不易流行：中国現代美術と身の周りの眼差し」展（1997年東京他巡回）、「台北ビエンナーレ：欲望場域」展（1998年台北市立美術館）、「SPIRAL　TV」展（1999年スパイラル）、「Twilight Sleep ： 日本のヴィデオアート」展（2000年ローマ日本文化会館）、「荒木経惟：Self, Life, Death」展（2005-6年ロンドン、バービカンアーツセンター、ベルギー国立写真美術館、ストックホルムクルチュールフゼット巡回）、「Programme Tropico-Vegetal」展（2006年パレ・ド・トーキョー）、「チャロー！インディア：インド美術の新時代」展（2008-09年森美術館、ソウル国立現代美術館、ウイーンエスル美術館巡回）、「直島：アートと建築のアーキペラゴ」展（2009年パレ・ド・トーキョー）等がある。（共同企画も含む）アジア・パシフィック・トリエンナーレ、リヨン・ビエンナーレ等の国際展での経験も多数。また、シャルジャ・ビエンナーレ等の図録や、国内外の美術誌への執筆、『Nobuyoshi Araki ： Self, Life, Death』（Phaidon Press）等共著も多い。

横浜トリエンナーレ2011　会場

①横浜美術館

横浜美術館は、1989年3月に、横浜博覧会の施設として開設し、同年11月3日に開館。19世紀後半以降の美術作品を中心に、ダリ、マグリット、ミロ、ピカソ、セザンヌ等の作家の作品、幕末・明治以来の横浜にゆかりの深い作家の作品等幅広く収集。写真伝来の地のひとつである横浜にある美術館として、写真コレクションも充実。建物は延床面積26,829㎡ 、丹下健三都市建設設計事務所の設計。

撮影：笠木靖之

交通案内

電車

みなとみらい線（東急東横線直通）をご利用の場合：みなとみらい駅下車、「美術館口（3番出口）」（横浜駅寄り改札口）を出て徒歩3分。
JR線、横浜市営地下鉄線をご利用の場合 ： 桜木町駅下車、【動く歩道】を利用、徒歩10分。

バス

桜木町駅から、市営バス156・292系統で「横浜美術館」下車。

車

桜木町駅前から日本丸方面へ入る。または桜木町駅前から紅葉坂交差点を右折してMM21地区へ入り、美術館へ。
横浜駅からは高島町MM21地区入口を通って美術館へ。いずれも3~5分（首都高「みなとみらいランプ」も利用できます）。

② 日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）

馬車道駅から徒歩4分の日本郵船海岸通倉庫は、1952年に物流倉庫としてスタートし、日本郵船歴史資料館を経て、2005年より、NPO法人BankART1929の運営するBankART Studio NYKとして、展覧会・パフォーマンスイベント・カフェ・ショップ・スタジオ・スクール等の会場として活用。2008年に設計事務所「みかんぐみ」による本格的改修設計を経て現在に至る。横浜トリエンナーレ2011では3階建鉄筋コンクリート造の建物の1階の一部と2-~3階の延床面積約2,500㎡を利用予定。

交通案内

電車

みなとみらい線「馬車道駅」（6番出口）徒歩4分

③その他周辺地域

メイン会場の周辺での展開も予定しております。決定次第お知らせいたします。

横浜トリエンナーレ　開催実績

	第１回	第２回	第３回
開催年	2001	2005	2008
会期	９月２日～11 月 11 日 (71 日間) ＊休館日４日含む	９月 28 日～12 月 18 日 (82 日間)	９月 13 日～11 月 30 日 (79 日間)
主会場	[2 会場] パシフィコ横浜展示ホール 赤レンガ倉庫１号館	[1 会場] 山下ふ頭３号・４号上屋	[7 会場] 新港ピア 日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK) 赤レンガ倉庫１号館 三渓園 ほか
テーマ	メガ・ウェイブ ー-新たな総合に向けて	アートサーカス [日常からの跳躍]	TIME CREVASSE タイムクレヴァス
ディレクター	アーティスティック・ ディレクター： 河本信治 建畠 晢 中村信夫 南條史生	総合ディレクター： 川俣　正	総合ディレクター： 水沢　勉
キュレーター	ー	天野太郎 芹沢高志 山野真悟	ダニエル・バーンバウム フー・ファン 三宅暁子 ハンス・ウルリッヒ・ オブリスト ベアトリクス・ルフ
参加作家数	109 作家	86 作家	72 作家
総事業費	約７億円	約９億円	約９億円
総入場者数	35 万人	19 万人	55 万人
有料会場 入場者数	約 15 万人※	約 12 万人	約 30 万人※
チケット 販売枚数	約 17 万枚	約 12 万枚	約９万枚
ボランティア 登録者数	719 人	1,222 人	1,510 人

*第１回、第３回については、有料会場の延べ入場者数